

令和3年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 最優秀賞
(国土交通大臣賞)

「人柱伝説から学んだこと」

新潟県 新潟市立亀田中学校 1年 松本 琉花

土砂災害はおそろしいものです。私たちの命や財産を一瞬で傷つけ、うばい、ひどい絶望感を残していきます。土砂災害は、今年もいろいろな地域で発生し、ニュースでは悲惨な状況を繰り返し伝えていました。土砂災害が発生するたびに、どれほどの人たちが恐怖を感じ、悲しい思いをしたことでしょうか。どんなに対策をしても自然の力は強大すぎて、太刀打ちできないことがあります。文明が発達した今ですら、土砂災害は私たちを苦しめています。では、技術が発展していない昔は、どうだったのでしょうか。私はふと疑問に思いました。

夏休みに上越にある地すべり資料館へ見学に行きました。そこで、土砂災害を防ぐために、人間を土に埋めるという衝撃的な事実を知りました。人柱というのだそうです。土砂災害は、神様のいかりや、もののけのしわざだと昔の人は考えていました。そこで、土砂災害をおさえるために、人間の命をいけにえとしてささげるという考え方があったようです。今の時代では考えられないことですが、当時の人たちは、命をかけて真剣に土砂災害に立ち向かっていたことがわかります。土砂災害がおきると、家もたんぼも畑も土の中に埋まってしまいます。一度埋まってしまったら、現代と違い、重機が土砂をとりのぞいたり、ダンプカーが土砂を運んだりできません。きっと、その土地を離れなければならなくなるでしょう。土砂災害が、当時の人たちにとって、どれほどやっかいなものだったか簡単に想像できます。

地すべり館のある地域からは、人柱になった方の人骨が、じっさいに出てきたといえます。鎌倉時代のお坊さんの骨だそうです。伝説では、このお坊さんが村人たちに地すべり対策工事を教え、その後、自ら進んで人柱となったということでした。けれど、地中に埋められたかめの中から人骨が出てきたことで、ただの伝説ではなく、本当にお坊さんが人柱として土の中で眠っていたことが分かりました。

私たちは、土砂災害から人々を救うために、人柱になることができるでしょうか。私は、自分だったらどうだろうと考えてみましたが、私には無理だと思いました。なぜ私だけが犠牲にならなければいけないのだろうと思うし、それ以前に怖いのです。だから、鎌倉時代のお坊さんの覚悟は、本当にすごいと思うのです。どんな思いで、土の中に埋まっていたのだろうと考えるけれど、想像もできません。その日、お坊さんが供養されているという人柱供養堂に向かって「ありがとうございます」と、私はそっと手をあわせて帰宅しました。

時代が変わり、現代の日本ではさまざまな土砂災害に対する技術が生まれています。誰ひとり、いけにえとして人柱になる必要はありません。人柱はすでに伝説の話であり、昔話になりました。現代は人柱をたてなくても土砂災害に備えることができました。コンクリートのかべ、砂防堰堤、植樹などたくさん方法があり、私たちのくらしは守られています。しかし、自然の力はあまりにも大きく、異常なほど降る雨や雪、ひんぱつする地震で土砂災害が発生してしまうのも現状です。私たちは、土砂災害の被害にあうたびに、安全なくらしをどうしたら手に入れられるかを考え、新しい方法を考えていかなければならないのでしょう。

昔、人柱を埋めて土砂災害を防ごうとしたことが、今の時代を生きる私には信じられません。そう考えると、もっと先の未来には、今よりも素晴らしい土砂災害防止の策が出来上がっていて、土砂災害とは無縁の生活を人々が送っているかもしれません。私は、土砂災害のたくさんの被害から、学び、知恵をしばり、新しい対策をとりながら生きて、次の世代へより安全なくらしをつないでいきたいと思いました。